

する徹底的弾圧を展開、譲歩政策論を提唱する者は、反革命世論を製造するもので、反動的、反革命的な論議であると極論した。一九七一年の『紅旗』第三期に掲載された「『譲歩政策論』 必須再批判」は、譲歩政策論に対する総括的批判で、これ以後は譲歩政策は歴史家が絶対に採りあげることのできぬ「禁区」となってしまうていた。

四人幫が打倒されて後、この禁区は歴史家に再び解放され、自由に譲歩政策について討論することができるようになった。八譲歩政策が四人幫によって、現実的政治問題にすりかえられていたことは、歴史家として、非常に残念なことであったが、今や再びこの問題が積極的にとりあげられるようになり、こうして陳作榮氏や趙德貴氏の論文が登場するようになったことは、喜ばしい次第である。

以上、本書の中の僅か数篇の論文しか紹介することができなかったが、中国の中でもいわば辺境に属する東北で、この様な論文集が吉林師範大学のスタッフによって作られていることは慶賀にたえない。ただ各編を読んで考えさせられることは、使用されている史料の点数がそれほど多くなく、而もそれらの史料が、きわめて一般的な史料に限られていることである。例えば、李洵教授の論文について言えば、万曆会典の他、古今圖書集成、明実録、明史、客座贅語、景船斎雜記などにすぎない。他の各篇についても、ほぼ同様である。長

春という、きわめて史料の乏しい土地で、この様な研究をする吉林師大のスタッフにとっては、並大抵の努力ではないと推察するが、もう少し豊富な史料をもちこまれることが望ましいのではないかと思われる。但し、そこには史料の偏在性——多くの史料が特定の大都市に集中している、という現実——にぶつからざるを得ない。この点に関しては、わが国の学界も同様の問題が存在しているのである。(B6判、三三三頁、一九七九年一〇月、吉林師大書報編輯部)

L・ベテック著
ラダック王国

山口 瑞 鳳

L・ベテック氏は我が国でも周知の東洋史学者であるが、その専門分野であるチベット史に関しては世界の第一人者に指折られる。同氏の盛名を擅にしたのは一九五〇年に公刊された *China and Tibet in the early 18th century* であったと云ってよいであろう。

今、取り上げている『ラダック王国』は右の名著に較べると、その量はいささか小さくなるが、内容的には決して劣る

ものではない。それどころか大成した著者の力量を如実に示すものとして、前作の *Aristocracy and government in Tibet*, Roma 1973 と共に関係の研究者の間に重宝せられるに違いない。

ひとえに讃辞を献する以外に云うことがない程、ヘテック氏のラダック史に対する貢献は大きい。ラダックと云えば一世紀以上も前に、この地に滞在した Alexander Cunningham の *Ladakh, physical, statistical, and historical; with notices of the surrounding countries*, London 1854 がはじめて一般的事情を伝えたものとして知られる。こうで A. H. Francke の *History of Western Tibet*, London 1907 を示し、更にその地に伝えられる史料を、碑文等は雑誌論文で、写本等を *Antiquities of Indian Tibet*, II, Calcutta 1926 即ち *La drags regyal rabs* 中にまぎれ、訳註をそえて公刊した。ヘテック氏は一九三九年に *A study on the Chronicles of Ladakh* を示してこれらの史料を見返し、古代チベット史から近代ラダック史に至るまでを広く論じた。その後 *"The Tibetan-Ladakh: Moghul War of 1681-83" (The Indian Historical Quarterly, 23, 1947)* と *"Notes on Ladakh history" (IHQ, 24, 1948)* によって前説を補足し、修正を試みてしばらくこの方面の研究が遠ざかっていた。近年新しい史料が手に入るようになって、*"The rulers of*

Bhutan c. 1650-1750" (*Oriens Extremus*, 19, 1972) と *"The 'Bri gung pa Set in Western Tibet and Ladakh" (Proceedings of the Coma de Körös memorial symposium, 1978)* など(「西チベット・ラダック地方のディギン派」『東洋学報』59-1・2)によって関連文献の調査に当たっていることを窺わせていたが、その結果がこの『ラダック王国』に美事に結実している。ヘテック氏の業績の前後を比較して見ると、ラダック史を فرانケ 以後のとりで開拓し、補足し、修正して今日の記述に到達したことがはっきりする。従って、その議論には無理に仮構されたところが見当らない。全文淡々と簡潔に述べられている。いわゆる *La drags regyal rabs* の諸文献に述べられていることがらが、可能な限りを尽して渉猟されたチベットの関連諸文献中の、多くの細い記述に裏打ちされた形で示されている。評者など未だ手にしたことのない文献も参照されている。著者の用いたチベット語文献から関係事項を探り出す作業だけについて見ても容易でないことが理解されるが、それも評者の検しえた限りでは遺漏がなかった。今後のラダック史研究はこの書物を出発点とすることになるうが、これを一層詳細に示すことは出来ても、超えることは至難の業になるであろう。

全体は十一章に分けられて巻末にナムゲル王朝(王名がすべてナムゲルで終るので便宜上この称を用いる)諸王の系図

が示され、文献目録、索引もつけられている。

第一章では史料を論じ、末尾にフランクの助手 Joseph Gergan (dge rgan bsoḍ nam tshé brtan) の遺稿をその子 Skal lan dge rgan が校訂出版した *bla dwags rgyal rabs 'chi med gter*, New Delhi 1976 及び D. Schuh: *Urkunden und Sonderschriften aus Zentral-Tibet, Ladakh und Zaskar*, St. Augustin 1976 を紹介しているのが注目される。

第二章は「初期の歴史」(五一―三頁)としてこの地域の構成人種ダルド Dardis から始めて秣羅娑、三波詞、女国、バルチスタン、大小勃律に及ぶ簡潔な記述が見える。後に見る吐蕃王朝末裔による支配以前はダルド系の住民がいたものとしている。

第三章「第一王朝」(十四―二四頁、目次では十五頁とあるが誤植)ではウースン王の次子ティキディン Khri kyid ing (llキーデ・ニマグン) の系統が西チベットに至り、長子の末裔がラダックに君臨したことを述べた後、諸王の在位について全く不明なクロノロジーに目安を与える試みを示している。やや事情の明かな二王タクブムデ Grags 'bun lde 及びロドゥー・チョクデン blo gros mchog lan とゲルク派との関係を手がかりとして二王の年代が推定されている。

第四章「第二(ナムゲル)王朝初期の支配者」(二五―三七頁)ナムゲル王朝は傍系が第一王朝を滅してこれに代った

のであるが、この時期にミルザ・ハイダルへの侵入があり、ミルザ・ハイダルの遺した情報と、伝承や碑文の伝えるところを併せてクロノロジーの整理を試みているが、無理な推定は避けている。ついで「タシ・ナムゲル bkra shis nman rgyal 王とディンパとの関係やジャムヤン・ナムゲル 'jam dbyans nman rgyal 王時代までの北方や中央チベット西部との関係が述べられる。

第五章「センゲ・ナムゲル王と西ヒマラヤにおけるラダックの支配」(三八―五六頁)では、この王とドクパのタクツァン・レーパ t'ag tshang ras pa (一五七四―一六五二) の関係を軸にして、グゲ王家の征服、中央チベットのカルマ・テンキョン王との接触、ゲルク派勢力の抑圧を述べ、一六三九年のカルプにおける回教徒との戦の敗北に注意している。その他、チュクル・ラマキャブ Cho kur bha na skyabs の侵入とツァン王との交流の区別が明かにされている。

第六章「ラダック王権の衰退」では、タクツァン・レーパ没後におけるダライ・ラマ政権の介入を一六六五年以後ラダックに樹立されたモグールの宗主権との関係で説明し、一六七九年におけるダライ・ラマ軍の侵入、モグールの援軍による反撃、チベット摂政サンゲー・ギャツォ Sangs rgyas rgya mtsho によるドクパ・ミバム・ワンポ Mi pham dhang po を用いた調停の成功までの経緯を示している。この部分では

ジュンガルのガルダンによる役割が将来更に明らかにされると事情は一層確かなものになるであろう。

第七章「一八世紀前半のラダック」(八一—一〇頁)ではその後のラダックにおけるゲルク派優勢工作の推移が先ず解明され、タシルンポ大寺と親しい関係にあったゲルセ・リンポチ *rGyal sras rin po che* の役割が紹介される。その後、ラダック王家とブリクに分家したタシ・ナムゲル *bKra shi nman rgyal* 王の紛争がモグルの介入を招く危険を孕んでいたため、ダライ・ラマ七世が晩年に有名なニンマ派のリクジン・ツェワン・ノルブ *rigs 'dzin Tshe dhang nor bu* (一六九八—一七五五) に依頼して調停に当らせた推移が述べられている。

第八章「ラダック王国の黄昏」(一一—一三七頁)ではツェワン・ナムゲル *Tshe dba'i nman rgyal* 王の暴政と回教への転宗、その子ツェテン・ナムゲル *Tshe brtan nman rgyal* 王の善政をはさんで繰り返されたツェル・ナムゲル *Tshe dpal nman rgyal* 王の悪政、一八二〇年以來カシミールのシーク国家の宗主権下に入り、カシユガリア旧勢力の亡命にあつては清朝の云いなりになったラダックの凋落ぶりが示されている。

第九章「ドグラ戦争」(一三八—一五二頁)ではジャンムの支配者グラブ・シン(一七九二—一八五七)による一八三

四からのラダック王国の征服過程が示される。ゾラワル・シンによるグゲ攻略がラサ政府軍によつて挫折させられると、勢づいたラダック軍が最後の抵抗を試みるが、援助に赴いたチベット軍と共にドグラ軍の前に潰え、独立を失い、チベット政府との政治的關係が失われたことを示して、その間のラダック王家の対応ふりとその後の事情までを明かにしている。

第十章「政府と行政」(一五三—一六三頁)ではラダック王国の行政組織について補足的な説明が試みられている。

第十一章「宗教史」(一六四—一七〇頁)では寺院關係の歴史が簡単に総括されて本文を補足している。

記述の全般にわたつて無駄がなく、以下に取りあげるような史料の解釈上の細い相違はありえても、本文の記述に当否を問わねばならない点は少なくとも筆者には見出しがたい。以下にそれらの諸点と誤写誤植と思われるものを列挙しておきたい。

1. *rGyal bu Rin chen* と *Rincana Bhojia* が同一人物であるなら *La dvas rgyal rabs* に誇らしい記述が残る筈であるからこの同一視は著者の広うとおりに困難であるが、この王の名そのものを挿入とするのもやや性急な結論のように思われる。たまたま見出された *Lha chen Rin chen* の名に

Rajatarangini の説に迎合して *rgyal bu* を附して呼ぶようになったとみてはどうであらうか。挿入ならば *Rajatarangini* に副う記述も入りこむ可能性が強いからである。

2、十五世紀の *blo gros mchog idan* と十六世紀前半に現れる *Lata Jughdan* を別の存在とみる (二七頁) のはおそらく正しいであろう。後者が *Mar-yul smad pa* の系統であるとすれば、前者が *Vaidurya ser po* に属する *Mang (Mar)* *Yul stod pa'i rgyal po* といわれつつある区別がある。(三二頁) とすれば、*lha btsun bSod nams dpal bzang po* は前者の系譜に属するといわれる。しかし、*Mar yul smad pa* と *La dvags stod gsham* と云う場合の低地を表わす *gsham* とが同じものを指すかどうかは確かめられねばならぬ。

3、*Seh-ge-mam-rgyal's father-in-law* (三六頁) は *'jam-dbya'n-mam-rgyal's father-in-law* の誤記と思われる。

4、二六年年支配した *Seng ge nam rgyal* 王が一六四二年に没したとされる場合 (三七頁)、チベットの計算では登位の年と没年が夫々一年に数えられるので一六一七年の登位となる。

5、『ダライ・ラマ五世自伝』の引用部分に対するアプティン Ahmad 氏の訳文は正しくないが、これを用いて "Probably a Ladakhi officer" と示している (六六頁)。しかし、これは

ラサ政府の国境看視官である。ゲルク派の寺領に対して課税して来たことに対する処置を尋ねて来たので、拒否するように指示して帰任させたのである。なお、『五世自伝』の中の *'brug pa sprul sku* 以下は別の文になる (同頁注三)。

6、"without the concurrence of the Qosot Khan, his patron and protector" と添えて戦争の決定はダライ・ラマ自身が下した旨を示す (七一頁) が、派遣された *dGa'ldan tshé dhang* がゲム汗の第六子 *dDo rje da las hung tha'i ji* の子であり、タシレンボの僧から還俗させて將軍にしたのであるから、右のように伝うためには今一つ説明が必要かと思われる。

7、また、七一七二頁にかけての記述はアプティン氏の誤訳を採用しているが、『五世自伝』の当該箇所では、*dGa'ldan tshé dhang* が出兵理由を説いたのに対し、その方針が適切でない旨を述べたダライ・ラマが (*di ga nas*) 説き、それに *sde pa blo bzang shyin pa* などが同調して延期していたが、*dGa'ldan tshé dhang* が坐視できないから一人でも出発すると意気まぎたので、延期しきれず *sde pa Sangs rgyas rgya mtsho* (直前 ff. 125a, 126a, 127b-128a) に *sde pa* 任命記録がある) がその気になったと出発させたのである。

8、*dGa'ldan tshé dhang* が *Ru thog* 經由で迂回し、*Chang la* に集結したラダック軍を壊滅したとする (七三頁)

のは、その後、ローを占領したとする記述と共に *Mi dbang rlogs brjod* f. 19a に抛る限り誤りである。そこには「ラサ軍が順に進んでローに軍営を張ったとした後、時にラダック軍が神託によって Byang la の谷に近く布陣したのを知り、dGa'ldan tshe dhang がその日のうちに軍を派遣したと云う、翌未明の闇の中に敵を潰走せしむことが出来たと示されている。従って Byang la は、後年マムラ戦争でラサ軍が集結した klung g-yog ma に近く Byang la (一四八頁参照) であって Ru thog より南西にある Chang la ではない。

6. "on 25 VII" (七三頁一一行) は "on 25 VIII" の誤植。

10. アフマド氏の訳文に依る条約条文の解釈には疑問が少なくない。今、甚しうものに限って云え、"The annual government trade……it was to cross the frontier at hDe mchog only" (七八頁) はその最後の一節が «*ia pag gru bzhi 'di La drags ma gtogs/gzhan mtha' la grong mi chog*» 「*この(二〇〇駄の)磚茶はラダック以外他の辺地に送り出されてはならない*」とある一文を歪曲して読んだものに基いてくるから改めるべきである。アフマド氏は "mtha'" に "mtha' khob" 「*辺地*」の意味があるのを知らず、現代的な意味で「*国境*」と読んでくる。また "the triennial mission

……" の原文 "lo gsum bar du" は「*三年間にわたって*」の意味であり、"lo gsum gsum la" "lo gsum re la" ではない。このような意味なら「*三年にわたる限らず*」"lo lhar" "lo re la" と示されたであらう。

11. "Then he left, perhaps for Dsungaria" (七九頁) は *Mi dbang rlogs brjod* f. 25a, l. 4 にある「再び偉人 dGa' lachn への人々 skor gsum 方面に旅立つ時」とあり、『*五世伝統*』Ca ff. 88b-89a に「その日(一六八四年十二月三日) dGa' ldan tshe dhang dpal bzang と No tshe ring bsam grub と供のものにラダック出発前の賜物を色々とした。四日に大招寺の大庭で Tshe dhang dpal bzang をはじめとするガリに出かける上下の軍人すべてに……」とあるので、訂正されるべきであらう。

12. 七九頁、注二 "DL 5a, Ca. 73b-75a" は "74a" の誤植。

13. "to which Lhasa issued a set of rules of behaviour" (八五頁) の根拠は『*五世伝統*』Cha, f. 198b には *ba' yig* をつくるために古い参考資料があった場合に呈出するようにと布令を配ったとのみある。

14. 八六頁、註三の示す十月五日の面会人名簿中該当者は見当たらない。また "No no blo-bzhan-don-grub" (八六頁) は "No no blo bzang dngos grub" の誤記と想われる。

51' "the lady bSod-nams-rgya-mtsho" (九九頁) は "the lady bSod-nams-mtsho mo" の誤植。同頁(二五)行四言頭の "completely" は重複誤植。

91' "Bu khrid dbang mo from bDe skyid in Nubra" (九九頁) は対応の出典が脱落している。

17' "queen Bu-khrid-rgyal mo" (一〇〇頁) は『ヤン・ト・ト・ト』f. 267a より "Bu khrid dbang mo" になつてゐる。

18' "because of their reciprocal misunderstandings" と解釈された "ma sgo so so stabs kyi" (一〇〇頁) はむしろ "ma sgo so so'i thabs kyi" 「母々の腹ごころの手袋を誰に」に読すべきであらう。

91' 一〇〇頁 註 DL, 291b-2921 は 291b-292a の誤植。

20' 一〇三頁 註五末尾 DL7, 409a は DL7, 409b の誤植。

21' "a younger brother(一〇四頁) は "a elder brother" (phu bo) の誤。むしろヤン・ト・ト・トに引く rGyal sras rin po che が前註の尺牘であるに注意せよ。この事実関係は確認されている。

22' *La dvags rgyal rabs* の記号と頭字がゆつゝ Nyi zla dbang mo に Kun 'dzom に代はつて現れる。こ

れは Sa skyong nam rgyal の妃と王位とつた子は現れつつある。その名は Kun 'dzom より rGyal-yum Ni-zla-dban-mo ではなくて A-yum Kun-'dzom ſi-zla-dban に同一視する(一〇八頁) らうが困難である。後述は特に Tshe dbang nam rgyal の母よりなる A-yum rgyal-mo の名がゆつゝである。

23' Phun tshogs nam rgyal の母は Bu khrid dpal 'dzom に同一視すべきである(一一〇頁) が誤りである。『ヤン・ト・ト・ト』f. 135b より後述の La dvags sa skyong gi btsun mo に定義している。sa skyong は普通名詞「王」に用いられる場合 La dvags Sa skyong に引く固有名称 Sa skyong nam rgyal の意味で用いられる場合の二つである。混用になっている。ただし f. 226a, 227a, b, 228b より「王」の意味ではなくである。むしろ「王」の意味に解するより、この当時の王の妃である Phun tshogs nam rgyal の母 Bu-khr d-dban-mo に同一視出来なべである。その妃であるのが Kun 'dzom nyi zla dbang (本稿注22参照) の同一視がゆつゝである。それゆへ Sa skyong nam rgyal の妃の出産は必ず Kun 'dzom にならなければならない。

24' He mi sprul sku 師が rGyal sras rin po che (一一一頁) はヤン・ト・ト・トの美兄の転生活伝。その転生

系譜は *rgyal sras sprul sku* と呼ばれる。しかし、これとその実子 *Mi pham tshe dbang phrin las bsTan 'dzin mi gyur rdo rje* は全く別のもので後者はくミス座主であったが活仏ではない。

25、*Mi pham tshe dbang*、即ち *Sa skyong* の年上の方の御子息 (*sras rgan pa*) が一七七〇年一月十六日に具足戒を受けた時の名が *blo bzang 'phrin las rgyal mtshan* であろう。具足戒を受けた (一一九頁) 同じ月にこの名が特に示され *gdug dkar lha so bdun ma* の灌頂を、かねての望み通り *ベンチン・ラマ* より受けたと『ベンチン・ラマ三世伝』f. 230a に述べられている。一七六六年一月に沙弥戒を受けた弟の *no no blo bzang bkra shis* は *La dvags No no* (一一二頁、註五) と呼ばれ、一七七五年 (九月末日) に漸く具足戒を受けた (前掲書 f. 162b) 様子であるからこの灌頂は受けられない。『ベンチン・ラマ三世伝』では *rgan pa, gzhon pa* (年上の方、若い方) としか示されず、*La dvags rgyal rabs* でも兄弟二人が挙げられているだけである。上記伝記でもその前後に二人以外が言及されていないから別人の設定は適当でない。なお、この時うけた名は *Brug pa* 系の *Mi pham* の名を *ベンチン・ラマ* の名に由来する *blo bzang* に代えてくれるものと見ることも出来る。

26、*lha sras* についてこれを「王子」の意味に解している

趣き (一二三頁) が見られるが、そうであるとすれば誤解である。*lha sras* は「神の子」であり、「王」*bsran po* を意味し、吐谷渾王の *Gnam gyi sras* 漢人の「天子」に通ずるものである。

27、*gzims chung la bzang ste gshlegs* を “retired to a cell and died there” (一二三頁) と訳すが、これは「部屋住みのうちに亡くなられた。」とすべきであろう。

28、一四四頁、三行目冒頭 “marriage of” は重複誤植。

後の部分の史料に関して評者の手許に *La dvags rgyal rabs* 以外検するものはなかったので触れることが出来なかった。

29、著者によれば *Purig* の西側にカシニール系の仏教があったと考えられるのみでラダックそのものは紀元一〇〇〇年以後まで仏教とは無縁であったとされている (一六五頁)。これは、新羅の慧超による『往五天竺国伝』にカシニールの東北にある大勃律・揚同・娑播惹の三国に仏教が信じられていたとされているのと抵触するように思われる。筆者はこの三国を夫々バルチスタン、ラダック東部、ラダックに当ると考えるからである。サキャバの *bsod nams rtshe mo* (一一四二—一一八二) が一一六七年に書いた *Chos la 'jug pa'i sgo* (*Sa skya bKa' 'bum*, Vol. Nga, f. 316a ll. 4-5) では「火のえ辰の年にブルンヤ *Bru zha* の国の政庁 *Shib pe coq*

1842 A.D., Roma (ISMEO) 1977.

la tshal において西部の仏教の元締を stod kyi chos kyi gzhi
'dzin たる僧 bande Chos kyi blo gros ン (チヤントの宰相
zhang Khnyi (Khr.) sum rje などが会合した時点で数える
なら、仏滅後二千九百六十九年になる。」との記事がある。

これは仏滅時を紀元前二二三三年とするもので、上記の数か
らこの年を差し引けば八三六年となり、年名と一致する。右
の僧について別のところの (Op. cit., f. 316b, l. 3) 「Mar
yul ン bande Chos kyi blo gros が計算したものからあと
は一致しないので古い文書を確かなものとみなした。」と示
しているの、この僧はギルギットと云うよりは太勃律、即
ち、バルチスタンから Mar yul' つまり、ラダックにかけて
の西部 stod の仏教を総括していたもので、当時のチベット
で云えば dPal chen po Yon tan のような立場の人物であ
ったと思われる。現存チベット大蔵経中にはブルシャ語から
訳出された『現觀法門莊嚴經』(北京版カンギル、No. 456)
があり、デンカルマ Idan dkar na 目録に見えないのでこ
れと結びつけて考えることも許される。従って、慧超の報告
をないがしろにしない方がよいのではないかと思われる。

本書にはヨーロッパ人の滞在記録等が申し分なく活用され
ていることは云うまでもない。一言で本書をまとめて評する
ならば、ラダック史の決定版が成ったと伝えるであらう。

Luciano Petech: *The Kingdom of Ladakh*, c. 950—

批評と紹介 山崎

G・P・ウパーディヤイー著

古代インドのバラモン

—— B.C. 二〇〇年頃—A.D. 五〇〇年頃の

バラモン階級の役割に関する一研究 ——

山崎 元 一

インドに入ったアーリヤ人は、祭式至上主義に立つヴェー
ダの宗教を発達させた。この宗教の司祭階級バラモンは、は
じめ苦行主義、生殖器崇拜、蛇神・樹神崇拜など雑多な要素
を含む先住民の宗教を嫌悪し蔑視していたのであるが、やが
てそれらの要素を受容しつつ自己を変質させ、渾然一体化し
た「ヒンドゥー教」の指導者となってゆく。こうした宗教の
変化、バラモン階級の変質は、いかなる社会・政治・経済・宗
教的な背景のもとになされたのか。本書の目的とするところ
は、この重要問題の解明にあり、時代的には、主としてマウ
リヤ朝末期からグプタ朝期までが対象となっている。著者ウ
パーディヤイーは、デリー大学やペイルートのアメリカカン大

第六十二巻 一五一